



忘れられた民族 - ジブシー

やました
山下

ただし
正

イギリス在住・翻訳家

日本で目にすることがない民族の筆頭にあげられるのはジブシーでしょうか。ジブシーは世界各地に散在していますが、どこでも社会的に排斥されています。今日はこのことをお伝えします。(ジブシーという呼び名は蔑称として避ける傾向があるのは事実ですが、当地イギリスでは新聞・雑誌・地名などいろんなところでジブシーという呼称は依然として多用されていますので、本稿でもそのように扱います。)

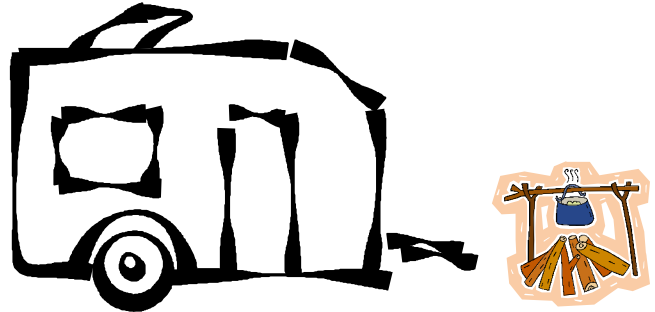
イギリスのジブシー人口は10万人ほどだと言われています。当地ではその名にふさわしく(?)多くのジブシーたちはキャンピングカーで生活し、移動しています。わりあい大きな集団で移動しますから、一定の場所が必要です。そこでキャンピングのターゲットとなるのは公園です。公園といってもイギリスの公園は、日本の公園と根本的に異なります。日本の猫の額のような空き地はイギリスでは公園とは呼びません。イギリスの公園は小さなものでも甲子園球場ぐらいの大きさがあります。この広大なスペースには草原あり、森あり、疎林あり、放牧場ありで、とても緑豊かなグリーンベルトとなっています。しかも小さな町でも必ずこの程度の公園は付随していますから、飛行機がロンドン空港に着陸態勢に入ったときに目にするのは、緑の海に街が浮かんでいるような光景です。

ジブシーのキャンピングカー集団は、こうした

公園を次々と移動していきます。当然のことながら、生活廃水、水道、電気、ゴミ処理などの問題が発生します。公園の木を燃料にしたり、電線から直接盗電したり、あたりかまわず排水したり、近所の住宅街の庭からちょっと物を拝借したりということが発生します。彼らは移動しますので子供たちは学校へ行けません。それにジブシーは一般的に子沢山です。昨年イギリスとフランスを結ぶユーロトンネルの無賃乗車でつかまった一家は9人の子持ちだったそうです。というわけで、キャンピング集団は周囲の住民と軋轢を起こします。そこで地方自治体も法的手段をもって、彼らを追い出そうとするので、ますます移動せざるを得ません。欧州ではどの国でも似たりよったりの事情です。あるときフランスのパリ郊外の河川敷で大きな漬物石のようなものが10メートルおきに点々と置かれているのをみたことがあります。これはジブシーのキャンプに対する自治体当局が講じた防止策でした。

こういう事例を具体的に書くとあたかもジブシーへの偏見を煽り立てる結果になりそうですから、ここで止めておきます。

正式な統計数字はないようですが、ジブシー人口は全世界では1000万人以上といえますから、決して小さな民族ではありません。しかしユダヤ人のようにまとまって政治的な影響力を発揮することはありませんから、いつの時代でも虐げられた



放浪の民でありつづけました。ナチによって虐殺されたジプシーの数は50万人とも100万人とも言われています。もともと人口統計がないわけですから犠牲者の正確な数字さえわからないのです。

最近の経済状況の悪化により、どこの国でも安直な少数民族の排斥運動が多発しています。欧州ではほとんどの国で、民族主義団体が排外運動を煽り、政治的にも大きな影響力をもちはじめているのはご承知のとおりです。好景気のときには少数民族を安い労働力として利用し、景気が悪化したら「職場が奪われる、治安が悪化する」ということで簡単に排斥する。イギリスには旧植民地時代の遺産として中近東やインドなどの少数民族がたくさんいます。彼らを排斥する傾向は近年のイスラム原理主義との絡みも一要因となって、いっそう激化しています。

しかしジプシーにはほとんど定職らしい定職がありません。もともと博労が多いと言われていますが、他には移動遊園地をやったりもしています。従って、ジプシーは、労働力絡みでの排斥のターゲットからも外れているのです。「外れている」という意味はもちろん「受け入れられている」と言う意味ではありません。ターゲットにされているということはまだその存在が意識されているわけですが、ジプシーは悲しいことに、その存在を抹殺しようとする意識からも排除されている、とでもいうことになりましょうか。つまり無視され

ているのです。「やっかいもの」としてつねに社会全体から排除されているにもかかわらず、意識のうえではターゲットになっていない。これほどひどい扱いは無いでしょう。

どんな民族からも排外思想を根絶することはとても難しいものです。さまざまな民族が混在しているヨーロッパに長く生活しているとそのことを痛感します（日本の在日朝鮮人・中国人差別問題なども例外ではありませんね）。どの国でも少数民族は「同化」させられるか「差別 排外」の対象かのどちらかになってしまいます。他民族が平和に共存している国は例外でしょう。

ジプシーは、かなしいかな、まず少数民族としてその存在を認めさせることから始めなければならないほどのひどい状態だと書きました。今のままでは彼らがまとまって声をあげることさえ困難で、アンタッチャブル的存在として、社会的不平等の踏み台であり続けるでしょう。

私はこの問題にたいしての処方箋は知りません。しかしわが日本をふりかえてみて、昨今の朝鮮人・中国人への蔑視や差別を助長するような社会的雰囲気を見るにつけ、ジプシー問題を他国の問題として看過できないように思います。労働組合と差別問題は切り離せません。労働組合はもっと広い視野をもって被差別者を包み込んだ運動体になってほしいものです。